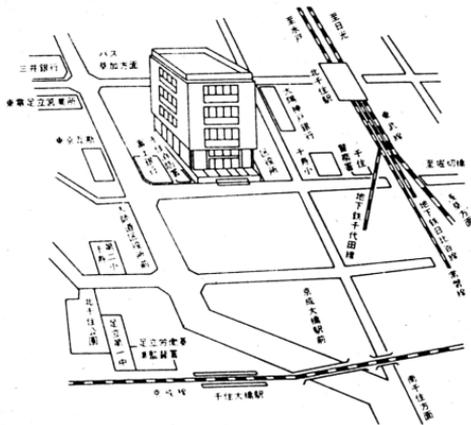


PERSONAL JOURNAL
No. 10 2
EFFEFTS
1986

第5回 公民館運動 への誘い

霜田誠二の企画で始まったこの「公共施設の制約下で表現される」催しも1月11日に4回目が終わり、次回はいつのまにか僕の責任担当となり、あわてて3月にあいている所を探して、やっと3月29日(土) P.M. 5:30より足立区産業振興館(国電・地下鉄北千住駅西口 ㊦(882)1668)に決まりました。最初、大きめのホールを租っていたのだけど都合がつかず、結局いつもと同じような展示・会議室の感じなので音量、その他の制約は依然としてあります。広さは180㎡でいつもより相当広いと思います。参加希望の方は2月15日までに連絡ください。(897)9502福本



北千住は足立区唯一の都会です。「Wに」という駅ビルの方に出て正面の商店街を進み「太陽神戸」で左折、「区役所前」の交差点を右折すると区役所がありその隣りです。歩いて10分位ですが早く歩けばもっと早く着けるでしょう。

※ 駐車場はなし。

しかし足立区でやるというのは画期的ですわ。中央線方面(僕にとっては辺境地)に住んでいる人が多いのでこの辺境地にくるのは大変かもしれないけれどよるしく出演者とのミーティングはチラシかできたい 2/2 以降に行く予定(場所は足立区でなくみんなの都営のいい所で)

☆PE第9号、どうもありがとう。ベストテンとは関係ないけど、熊井和恵とHALの文章が面白かった（「面白かった」と言うとは何か言われそうだけど……その辺は後述）。

☆熊井氏の文章について、金野氏は「自我の発現場を見る思いがする」と言っていた。僕の率直な感想は、「熊井も変わったもんだ」「だいぶ学習したりさせられたりしたんだろうな」「エコロジーから労働運動へ興味が移るってというのは通常と逆のコースで面白い」「今後はモノホンの労働者になるのだろうか」「変に啓蒙的にならなきゃいいが」といったところです。良い変化なのかどうかは、今はデータ不足で判断できないな。

☆HAL氏の文章を読んで、僕も8、9年前にこんな物言いをしたり、文章を書いたことがあるのを思い出した。引用されている『虚無への供物』が当時の僕の愛読書であったことも、でも、その頃の自分の心情から彼の心理を類推したりするのはヤバイから、その辺を抜きにして感想を言えば、『『異質なモノゴト、考え方を導入』する主体は誰かという、それはこの小さなメディアに進んで参加する個人以外ではない。異質なものを導入しようという目標をかざして、福木氏・乙部氏が、実質的な編集者の立場で、異質な人に異質な意見を求めるようなことはするべきではない（僕はそういった『プロデュース根性』と一線を画しているところにPEの価値を見出だしているのだ）』『HAL氏が異質な意見を持っているのであれば、『親切心から』の高みの物言いでなく、『痛みのもと』具体的な発言をして、PEを前向きに攪乱すべきだろう（少なくともPEが『異見』を排除することはないと信じる）』ということ。彼がどういう人なのか分からないので、この程度のことしか言えませんが。

☆もちろん「面白けりゃなんでもいい」わけはないけど、面白いものは面白いでしょう、やっぱり？ 面白いと思ったものを無理にしかつめらしくしてつまらなくなる不自由さは、面白くないものを無理して面白がる不自由さと同様に御免こうむりたいです。僕は（常に、とは断言しないけど）自分の不幸だって面白がるくらいには自分を相対化できる（そのほうがいいと思う）し、優しさと残酷さを併せ持つ人間の複雑怪奇なところはとりあえず肯定すべきものだと考えます。ヤバイのは「面白がること」が自己目的化したときではないだろうか。

☆ところで、②のベストテンはひでーなー。困ったもんだ。
☆、また本の話になると：『多型倒錯』（上野千鶴子・宮迫千鶴）はやっぱり良かった。対談として面白く、当事者の相互サイコセラピーとしても成功している希有な例。それから、僕は人を羨むことはめったにないんだけど、異人であることを謳歌している宮迫氏の様子を正直羨ましいと思った。／『快楽の構造』（大島清）は基本的には真面目なセクソロジーの本だが、筆者の視野の広さとユーモアがにじみ出た好読物となっている。／『人間時計』（徳南晴一郎）は大里氏から借りた、幻の作家による怪奇漫画。物語は単純なのだが、奇妙な味、オブセッション、そしてなんととっても異様な絵（金野氏は

「ヤセイのセンスに似ている」と言ったが、確かに通じるところはある）！もう入手できそうにないとのこと、残念。他の作品（『猫の喪服』なんて、タイトルだけで嬉しくなる）も読みたいが……。／『異人論序説』（赤坂憲雄）は在野の学者の地道な研究の積み重ね、といった感じの労作。“内”と“外”の二元論に終始している点にはちょっと苛立つところもあるが、著者も言うように本書は“考古学的側面”に重点を置いた研究書であり、その限りにおいては、この二元論は有効性を持ちうると思う。ただ、僕が知りたいのは、例えば、今や「単に」排除されようとしているとしか思えぬ異人たちの、奪われた聖性に代わるものは何なのか、といった問題である。次回作において展開されるであろう、こうした“現象学的側面”にかかわる研究に期待したい。／『自由の新たな空間』（F.ガタリ+T.ネグリ）は政治的マニフェストあるいはアジェンションの書。著者たちが提示する共産主義＝「個人的かつ集団的な特異／固有性を解放する試み」（粉川哲夫の訳によれば「個人的かつ集団的な諸々の唯一性の解放の方法」）は極めて魅力的であると同時に途方もないのであり、生まれるのが遅すぎた（そう思えてならないことがある）、ロマンチックになれない僕には、理解はできても納得できない点が多い。'68年のいわゆる5月革命にシンクロニシティを実感したと語る竹田氏や平井氏のような世代の人には、著者たちの言葉がストレートに響くのであろうが……。ともあれ、ガタリの著作は、もっと邦訳が出てほしい（ドゥルーズのものね）、ただし、もっと良い訳文で。／『反日本人論』（ロビン・ギル）は、それこそ「異質な考え方」に溢れた好著。俗流日本人論に代表される東西比較文化論の誤謬が次々に暴かれ、ドグマがひっくり返されていく様は痛快だ。筆者の立場はいわばポスト・エコロジストと言ってよさそうだが、その種の人間によく見られる胡散臭さのない点に好感が持てる。／『エビスヨシカズの秘かな愉しみ』（蛭子能収）を読んで感動するのは、著者の正直で飾りのない人柄です。それは事実の描写においても妄想のスケッチにおいても一貫しているけど、こんなに「カッコつけない」アーティストは珍しいんじゃないかな。漫画よりもエッセイのほうが面白いという最近の傾向にはちょっと困る気もしますが……。それにしても、蛭子氏は本当に映画が好きなんだな。／『ダカーボ』では最新号の特集「日記の楽しみ」が面白い（前述の蛭子本も日記の体裁を採っています）。／『嗜の真相』2月号の「筒井康隆のマスコミ誌」における部落解放同盟からの抗議の顛末（次号にも続く予定）は、ピナコテカの『タコ』のレコードにまつわる類似のトラブルを思い起こさせた。これらの報告から判断する限り、僕には部落解放同盟の恫喝的な物言いに、当の部落差別と同型の陰湿さと危険性を感じざるを得ない。ただ、筒井がよく言う「タブーの多い社会ほど原始的な社会である」と言った考えには、別の意味で問題があると思う。……それからこれは1月号だけど、[若手の元プロレスラーが赤裸々に発表する“猪木プロレス”の正体]っていう記事。「演劇論」に置き換えて読むのも一興だと思った。

☆観たもの：《公民館運動》。体調悪く、集中して観れなかつた。自分のパート

も、良く分からないままに終わった(技術的にミスが多かったことは自覚しているが)。公民館も既に4回目だが、常に物足りなさが残るところが^{良い}悪い。

／《ニューヨークアート・ナウ展》。腐ったポップアート・サンプリングアート(?)・直感アート・ジャンクアート・なんなんだこれはアート。面白い作品(少ない)もつまらない作品(多い)もありますが、一言でいうと呆れました。こういう作品が売買されているというのは、やっぱり不思議だ。

☆《PSE》には、今井隆+大野由美子、乙部聖子、福本健修、金野吉晃、藤本和男といった従来からの面々に加えて、金野万里(金野吉晃氏の奥さん)、鈴木健雄から参加作品が届いています。締切り(毎月25日です、念のため)までもう少し増えるでしょうが、これで第3号は2月初めには出せそうです。

☆それでは、また!

19860119



ピナコテカ氏から手紙がきた。彼自身のPEというヤチもので面白く公表したいところもあつたが投稿ではほいらしいので残念。PEを綿密に読んでのひとりのような疑問、質問にひとつひとつ答えるべきかもしれないか

例えば「公民館運動」とは何かが知らなかつたようで、どうか少し説明が必要であつたかなと思つたりした。他の人も気になることがあれば聞いてほしいし、僕はケソ君の読書録から適当に選んで面白かつたり理解できなかつたりして、そんな反応でPEが続いていけばうれしい。今号は20人くらいに送るけれど増減はいつでもあり、僕の知らない人もいますしみんなが知り合いというわけではない。たつたうピナコテカ、誰だかという人もいますうしその説明もすべきかどうかはわからない。やがてすべての言葉を説明しなればならない迷路に入り込むかもしれない。ともあれ8号で「投稿者3人……どういうつもりで読んでいるのたろう」という意見は同感といつかどう思っているのかなという感じで、もっと意見の交錯する方が面白いと思いませんか? といったも勿論何を強要するものでもない。どう受けとろうと自由たつたPEをどう発展させようという野にもない。特定少数の間に反響する手紙でいいし、ちよつと覗いてみたい日記の様なものと僕は考えている。

(C)

- ①①・ワイルド本舗 (TVのお笑い番組) 大形美居「ヌメ表列の加ハシ」の中でガウ射撃する。
・信仰治療の世界 (TV放送大学「宗教理論」) 日本の新興宗教の記録が例に出る。信者は泊4日の行程でオルグされる。その最後の4日目にははじめて教祖様が皆の前に姿をあらわす。会場は興奮のうねり。何とか彼に触ろうとする信者によって彼もみくらにされる。彼の外見は若石翼限。ガイナ集団自設の教祖にみくらのような一種の性的魅力を持つ。話術がすごい。ま、このお角栄なみた。司会者 (! 芸能ジョーアンチ) の紹介により、信者達は続々と皆の前に出て報告しはじめ。病気がなお、歩けるようになった! 眼がみえるようになった! (うらやましい) 乗り遅れたくない。という気持ちに持ってゆくゆきようが (演出か) 実に巧みと思う。
- ・モリス・バブーレのデュオニクスー20世紀バレエ団 (教育TV) バレエとしては斬新かつドラマティック。日常的な身振。無意味なく、が単なる変わった味つけにしかすぎない (ということもないが) 点が物足りないというか、基調となすバレエ的美しさが気になるところ。興味深いのは舞踏者の発声の瞬間。ニクスーが女どもにめくらに11たぶられるシーンがおもしろい。
- ①②・山谷越冬斗争【山谷は日雇労働者の街である、正月休みには仕事がなく → 金に困る → 野宿 → 凍死。その行政機関や警察権力による野宿死に攻撃」ところを、炊き出し人民ポロロ (街を巡回し病人を収容したりも布やカイロ、雑炊を配りまわす) などにより支援してゆく連が (例え同じメンバーでも) 味わぬもの。事がそれと太鼓がうまいというところ。歌、リズム、自然の発露がある。音楽の初源の形か。情報誌などには載せられていない山谷の人のためのコンサートに私まで来てほしいかと思ってしまう。(私がしたとは古着のみのみ)。沖縄からの支援者も来ていて、その在日沖縄人という言葉にあらはれと思ふことは私のウサエ物語りが、のちに読む「多型創錯」という対談本で宮迫千鶴は自分自身を在日日本人と呼ぶ。(次元が違ってくると思うけど)
- ①③・山谷越冬斗争における「^ト山谷 やられんやりにかせ」の上映会。この映画の監督、佐藤清夫氏は1984年12月22日、右翼に刺殺されている。この映画が完成したのは1985年である。?。仮題「生きてこの暗闇を焼き尽せ!」が「やられんやりにかせ」になったということが物語るもの。武器としてのカメラ、プロパガンダとしての映画。私にとっては「風の旅団」公演時に流されたプロモーションスルムの方がジョッキングだ。た。はじめてみたせいか、映画に巧みかぶるまで中々、美居の導入部のEP
- ①④・片山健個展。昔に比べてインパクトが薄いのは油絵という年輩のせいか。泉の強烈な布

・公民館運動。自分のこいて南といふ「前回」行為した時に、在物語性、不自然な緊張感と反対のことをやってみようと思つた。そこで公民館運動はいつもVTRで記録されているのだ。誰が見るのだらう。出演者は与えられる義務があるのだらうか。8:13分間VTRに収録されている。おまけに都合で見にゆかないのでVTRに撮りたいという霜田誠二氏の発想にはびっくりした。つまり、私には映画はVTRに撮るものではないという妙な思ひ込みがあったので、考えてみれば私だてTVで放映された映画をVTRにとっている。VTRに記録しておくことよりそれが開かれたものにしておくことは喜ばしいことであらう。映画は暗闇の中でこそ本来の姿を持つものではないか。それは「風の旅団」の話にみるが、彼らの足居のVTRは殆どないのだ。公演の終わった時点で大道具小道具などは燃やされてしまう。それは、某居とは石端に居合わせた人々のためにあると考へ方からいってその潔さがうらやましい。(再利用できるものもあれば、^{志願}ない)

⑬ 映画「山谷…」の実質的監督であった山岡強一氏が右翼西戸組により撃ち殺された。(彼の属していた山谷争議団は以前、トビウバネに暴利をむさぼる暴力団放逐運動を続け、西戸組と対立関係が続いていた。佐藤監督を殺したのも西戸組である)だが映画のために人の命が奪われるとは、この圧倒的現実の前に私の「表現」などは然る首を垂れざるをえない。表現とは何かのためにあるものではない、という居直り方もできるけど、表現の自由とは?

⑭ HIPM (NHK TV) 国見元や花柳の舟りに対して映画「山谷…」の紹介あり。[今の時代]

⑮ 「櫻画報大全」(赤瀬川原平) 買う。新書を買つたのは何年ぶりか。大塚の雑誌でこの本

⑯ 皮膚の東シマテ vol.2 河田白郎、乙部聖子作品集。拍手と黒字羊2750が嬉しい

⑰ 「山谷争議団幹部射殺の組員逮捕」なる。土方要致す。1/8に於て私の石山を整理していた時、'72年頃の土方とその周囲の舞踏をとりこみ出した。そのころの知らず知らずのうちに私は彼(ら)の行為を無断でアインツの中に切りとれたかの無神経をもちあわせていた。土方が写っている部分が少ない。その理由は①見るに夢中下れた②8ミリ撮影機がうるさい、9-音に恐怖した。①の解消法として最近のアインツを9ミリに撮る方法をとっている。どう今でも私は食費癖に悩まされているのだ。催し物に於て、VTR 11ヶかがと持てゆくことと久しくしてゐなかつたが、「風の旅団」の誘惑には負けた。催し物を観客がどう料理しようとするか、観客の勝手から感動を持ち帰りにすることと浅ましく思う今日この頃。荒井真一編集の自販機本「クリス」も、このころに「五五五俱樂部」は充実の一途をたどる。

⑳ 久々に古本屋に入る(大井町にて)「思想の科学—正常とは何か」に載っている「精神病を「治療」する必要はあるか」という考え方にはとまぜられる。買ったのは「自然食通信」特集。113人な人がいるも人だ。昔、新聞で紹介されたのを思い出して買ったけど、家に帰ってきて、風味氏が書いてある「ボイスの印象」(山本青大詩集)彼は私の大学のクワの先輩。…1/4ボイス死す…やはり家に帰ってきて一読し「大井海岸の海腹で飛び去るものの銀色の腹を…」の一節があるのに驚く。という日の午後、羽田沖で飛行機を水中に叩きつけておける行為をしていたからで。その時、一人の犬が戯れしてきた。その無邪気にフワフワつられておつたあいが始まる。犬は水中にまづいてきてカメラを宙牙にかけようとする。そのうち私にかみつきたい欲情はにある。犬の天真から私との終着駅はどのような所にあるのか。その手はつたあいがいい。同志だと思つたのに、一気に雌犬の地位までひたりおろされ、裏切られた気分。その同列性が嬉しい、という見方もできるけど、噛みついて痛くて私は犬を排除する。それにしても犬が陽気な狂躁をおも、家に帰るとピコリカ女よりの手紙がきている。P.E.に対する手紙にえある反応が最近あるのが嬉しい。封筒に使われぬ手紙の体裁、広告の裏に利用しているの、ピコリカ女は丸亀在住の人。彼が情報量の多さについて言及している。私の情報源はTVと図書館の殆んど。自転車で20分以内の距離に3つの図書館がある。1/4月に30冊位借りてる。新刊本は三年一度位。雑誌は買わない。映画は福本女の本社の奥の倉庫で夕暮赤い時はやたら見たけど、この2ヶ月ほど見ていない。D-Fは「79年と200年」と見ている。なせか2本立てでありてくるまでガマンしよう。要するにケチ。(これで結局見事にぐいと思つたのが去年の「登山」→人がやたら飛ぶ香港映画)。L-Fは買わない。今年より図書館で借り始める。(2週間3枚x2) ティーン(85年10月号コンピ)に到着。流れを知りたくて、ツナミ、クイン、ボブ、リサの3人/と借りる。やはりティーンは飛ばして軽かて自在にのみだ。年と、1/4と1/4年演奏するのだらう。ボブ、リサ、ティーンを好きで、ピコリカ女の料理法が面白い。でも「ジャン」は頭でできたような曲。とどめられた部屋の中で鑑賞するようさ。(「からだが震る授業が変わる」島山敏子)ね。他に「レイドのプラムとバートン」嘉年刺林昌「おきろの心」と借りる。…情報が多すぎる(自分と多くしているだけだね)

㉑ 「生きる」黒沢明(TV)主人公が我が子と際限なく囁く時、画面の方にはその囁きに

木にアップして無義の出征兵士が写し出される。黒沢女も昔はすこいバクを持っていた。
・キャスト10「15生が残した自殺のSOS」(TV朝日)人はまだ不本治君を忘れている。
専門家にお調査報告書と市民グループにおそれと同列にとあげていない点に不満。(後者は簡単な
紹介のみ)前者は木本君の絵と「子供の絵でこの不気味な絵は初めて…後味の悪い絵、何かか
こもっている気味悪さ」と指摘し「このSOSのサイン」の絵は彼の苦悶を表現していたか教師も両親
も共感的理解かできかた」としているが..。その絵は1枚のワケの表裏に描かれたもので、その一
方には突にあとけない表情の男の子が描かれ、裏を返してみるとその同じ男の子が幽鬼の表情も
凄く血を流している。(幽霊の絵を模写したもの)その落差は激しくショックで肝を抜くもの。
この表現を「子供の絵で…」とワケ付けて見るのは「小見橋春相談センター所長(報告製作者)と
しては当然のことだろうが、専門家には「子供は無邪気なもの」という無邪気な幻想があるの
はなかろうか。(私にとっては「学校をハメツライ」と思ふことのないうちはアキだ)ショック
で鏡に表現に心を刺された時、又してそれを「気味悪い」と排除してゆこうとする傾向がある
ようだ。古谷網正という人がデュエルの「ペンタクルの犬」の冒頭、眼を切り裂いてゆく
シーンについて「どうしてこんなことをするのだろう…私はデュエルを憎んだ」と書い
ていたのが私にはショックだった。そうか、憎まれてしまうのか…。しかし木本君の表現は
多岐にわたっている。ユモラスなもの、ほろほろしたもの。それと、ワケの絵とことさらに
取り上げて「SOSのサイン」というのは、当然その絵の、幽霊の側だけ見て、その裏にある
(あるいは表の)無邪気な一面を無視していると言わざるをえないのは。その両極性が
コワイというなら、自分の中にそういう二面性があることに気がかない人は、しあわせな人だ。
専門家は「家庭内で過剰適応」している等と暗に家庭内原因を指摘している
ようだが、このような分析は物事を本質から遠く去けてゆくものでは、再現シーンを
再現すると「皆たて(学校をハメツライと)思っているよ」と思っている」という教室内の
サワヤキ。「1人だけじゃない、みんなかと思ってるのは。」「お環気が狂っている人はいない?
みんなかと思ってる子がどうして学校にくる?」「将来のためです」「みんなに将来がある
と思ってる?よくて精神病院行きよ」として反省文を書かぬ職員室によばれ、わか
ばきのまじり帰宅し、高層アパートの踊り場へゆき、何か向かのためぐいの後飛びおきる。
自殺の原因は私には明白に思われる。他殺といった言うべきであろうか…。もち

ろん教師のみを責めて済まされる問題ではない。杉本君にもBookishな着に
ありがちなモロスはあったろう。今の世でユークであるとは不幸なことであるとの意見
もある。彼個人の向題ではないものがひそんでいるはずなのに、専門家にとり、このトスは
心理学上の一つの素材にすぎない。番組では市民グループによる報告書を「かなり参考
になるのでは」と片付けていたが、私にとっては「専門家による報告書」は実に「参考」に
なした。市民グループによる報告書に私が紹介してほいものた。 (ちよと外かつたがる)

(126) ついてあり池袋西武へゆく。パルヴァンに荻井真一氏の銅版画のポスターが貼ってある。
よいなあ。(クリスも売ってる) フラッシュアップにゆく。その書物の洪水に圧倒される。早々に逃げ帰
る。「A型倒錯」(上野千鶴子・宮迫の対談)が3ヶ所にわたり積り込んでいる。(図書館に借りた。
おきた。ラクになた。本音のお話はおもろい)。「ピルタド・ステイツ」ケン・ラセル(TV)作品の
いけんとしている所は「ハンデルのタイトリス」と同じ。ラストが甘く感じられるのは監督自身が
「学内」(artでも可)より「現実」(愛でも可)だ。とはあり思、でいいからでは。私は作品の
言めんとしている所より細部を茶しむ。幻覚のシノは実験映画風で、映画館で2回見
ているけどTVで見ても面白かった。でもそれをVTRに撮り、分析的？にみてしようともう
面白くない。クソいやってる友人があれは、おん手取しやない、とバカにしていた。け。

(128) 図書館で 1/2 発売「サンデー毎日」読む。立松和平氏が故山岡強一Aにインタ
ビューしたものが掲載されている。故山岡氏は故佐藤氏の視点を「カクワイ労働者」につ
刺すでゆく。…一種の見る暴力だね」と語り「オレ達としては人間が山谷を撮るということ
視点を立て直した」と語っている。山岡氏は彼等の山谷の映画をも撮る予定だったときもいる。
「ニュースステーション」山谷取材報告」(TV朝日)コンパクトにわかりやすくまとめられている。
意外に深い斬り込み方。と私が感じたのは、山谷の昔の石ルム。山谷事件史から語り始め、1人の
日雇い労働者の1日を追い、1万1000円の賃金が労働者へ手渡しする時には3500円に落ちる
というピンハンの具体的数字を出し「争議団はすぐ企業にドナリするので企業は山谷に仕事
回さなくした」という西戸組の御意見、「今、困っている時に、賃金が安い高いの言てられ
ない」という労働者の声をも網羅している作り方のせいだろう。そういえば昔、立松和平氏に
よる山谷取材TV番組があった。彼の暖かい語り口、たゞのべかたしう一体感が印象的だった。

(129) スポーツシャトル爆撃についてのコメントで「原因究明は本体が海の底に沈ん

てしまっただけに大変だろうと思う。(立花隆) '今回は落下物は海上に落ち、ことなきをえたが、今後、予想される事故では地上の人たちを巻き込む
第二次災害も十分考えられる。(牛塚治虫) それにしてもすごい授業だった。

③⑩ 中村敦夫の地球祭22時「潜入取材「ホリリ地区」の一周内」
(TBS TV) 暴力団金融、年寄師、トバク、の紹介。最後に1人の労働者の
部屋にかうは入ってゆく。彼は女に裏切られた人生を語り、寂しいことあり
ませんかと聞かれると彼は壁を指差し「祈りがあります」と言う。その指
先を追ってゆくと、そこにキリスト像が... ラストにこのエピソードをもってくること
にこの番組の演出を感してほう。

④① この本を書いている。今月は書くまいと思っていたのに。饒舌さにジグジ
たるものがある。ナンテ 全部読んでくれたら、ごくらうまでよ。

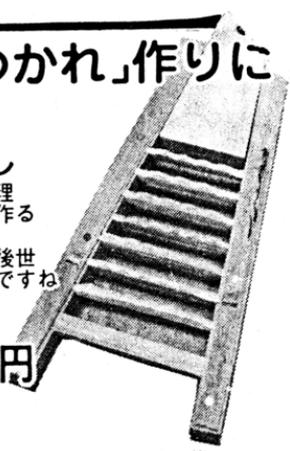


「しもつかれ」作りに

おにおろし

北関東の名物料理
「しもつかれ」を作る
時に使います
伝統の味を永く後世
に伝えたいものです

550円



みんなも当然知っている
「しもつかれ」は煮ても焼く
いてもナマでもおいしい食
べれる。癒れて仕事から
帰った時の一口なんて最高
だね。そして「しもつかれ」
を作るのになくてはなら
ない「おにおろし」。この値
段で手に入るなんて嘘
みたい。これでいってほ
家で作ることかできる。

とさで何これ?

私の、私の映画感 乙部 聖子

河田氏との上映会は私にとりて久々のものだった。去年も加藤到氏らと共に上映会をおこなっているが、ビデオもパワーマンも含めての企画だったので8ミリ映画を上映する際も99年以降の作品のみで、初期頃のものはいり捨てた。その切り捨ててしまった部分のあたりに河田氏が未だにこだわり続けていることが嬉しくもあり同時に私の反省させられるべき所でもある。つまりそれは8ミリ映画の本来もつべき個人性・極私性・肉體性といったものこと。なぜ私は去年の上映会でそれらを切り捨てたか。例えば90年代前半には8ミリ上映の場に熱い連帯感加添っていたと思う。(映画をつくり始めた頃、私は「これで世界とつながれる」と思ったものだが)そこでは受け手と作り手が未分化の状態だった。観客は作品?をみて感じる所があれば即カメラを持ち自ら語り始めた。作家?とても同じこと。互いに影響しつつつたの生成の場としてあった。60年代初めに8ミリを手にしていた飯村隆彦、大林宣彦らとは違つた、8ミリをしか語れぬ世界を持つ人々かいた。しかし、その場合、8ミリ機材の充実(特にトキ機構のそれ)と共に、劇映画が主流となつてしまつた。

付) その二 「不思議少年通信」(河田白郎氏)掲載のもの

今では、私の映画は「気持ち悪いもの」としてくくられてみられるのでは、という予感。世に氾濫するグロテスク、スプラウクムシロビーと同列に、見せ物あるいは覗きみるものとして「観客」にみられることに抵抗があった。もちろん90年代にもそういう反意はあった。異常だ、と吐き捨てるように言われる。ジャンキー? (これは嬉しい反意。私はクスリのリスクとは無縁だけれど) 森田芳光は彼の企画した上映会で、目とむけて中かねは「眼を半分つぶってごらん下さい」と本音をもらす。ある者は私を精神病理的に分析しようとする。それらの言葉は皆、その人自身をも物語るものでもある。「どうして気持ち悪いものを撮るの?」という問いがある。それは、人の、そして自分自身のどろもを抜きたいから。うじ虫、屍体から目とをむけたくなる自分をあざ笑つてやりたりから、みつめ続けてゆく世の中には気持ち悪いものなど何もなくなる。つまり自分を追いつめてゆく最後には救済する一種の治療の場であった。私の初期の映画は、その、決着つけたがる。納得したがる姿勢が今となっては古めかしく説教くさく。自己完結的な閉ぢられた世界をつくつてしまつていふな、という気がする。また、今、振り返ると「作品」のためにずいぶん無理したなあと思つてしまう。

例えはその頃、映画のために二人の知人にラヴシーンを

演じさせた。(当人同志は未知のあいだから)それは

私の作家としての暴力性を物語る。フライングを

覗くという一種の特権的行為からのみれる方法は?

そこで私は「夢から醒めたまはし」(今泉了輔氏作品

だ)を思い出す。自分自身にカメラをむける行為。フライン

グのむこうには何も無い。彼は空無によって自ら加観されて

いる。私はミニに個人映画としての8ミリの窮極の形をみる。

この上映会を機に、今までパフォーマンスの背景的に使っ

ていた自分のフィルムをもう一度とらえ直したいと思っ

ている。「作品の中に何らかの形で即興性を残しておき

たいという気はする。(例えば上映スピードの变换とか

音楽の生演)また撮影する際にどうしようもなく

つままとしてくる美意識といったものも何とかしたい

と思っている。(それを保持しているゆえに私はことさらに

醜いといわれているものに対して固執していたのかも

しれないが)それから私の映画の個人性、閉鎖性、非

社会性。今のところは、映画ではメッセジ(言語的)を

伝えたのと思っていない。

加年代前半の8ミリ映画をもう一回見直してみたい。

できれば上映会という形にもってゆきたいと思っ

若干の雑感

福本健修

ビデオが普及してきたとはいえず、8ミリをとっている

人は結構いるんだ。うけどストーリー中心のいわゆる娯楽

映画の真似事には興味がない。昔実験映画・個人映

画といわれていた8ミリなどは退屈なものもあつたか

作家の内面性に根ざした表現行為として存在した。

感情の自己表出・映像に対する創造精神の産物

たつた。今回久し振りに河田之部 乙部聖子について

二人展を開く。また彼らにはそれ以外の

矢われていない点がある。河田作品はすべて同じように見え

たのは良いことも悪いこともある

たろう。SM的な縛り全体を縛りつ

けているようだ。下に示るのはニュー

ズネマ初のパンフレット。たか加 行琴子的

な「リターン」。「白蓮華」の昔の印象は同感。

以後、アニメ、水中撮影とスタイルは

変わっているように見えるが本質的

な美意識・無常感は同じだと思つた。

共に、これからもこり結んでほしい。

乙部聖子について

彼女のフィルムを見ると、時々ギョッと

する場面が出てくる。動物や昆虫の死骸は序の口、オチ

キの瘡蓋をピンセットではがして

血の出ている傷口をぐちゃぐちゃ

はじくり返す。なんてのもある。

それも、茶碗やコップを写す様に

あつさりである。なんて女だ。

物静かで決して自分から話しかけ

ることなく少女の様な涼やかな顔

で、観ている者を恐がらせるフイ

ルムをつくる。なんて女だ。

被写体と自分、作品と自分との

距離を決してくすすうとしない。

被写体を観察している自分の目に

決して感情の衣を着せようとしな

い。なんて面白い女だ。この作者

の冷徹な目がバランスを失うのは

一体どんな時なのだろうと思つて

しまう。感情剥出しにしても手に

入れたものがないのだろうか。

今、音楽をやっています。とポツ

リと云つた。